

緑山遺跡出土の瓦—勝呂廃寺の系譜の中で—

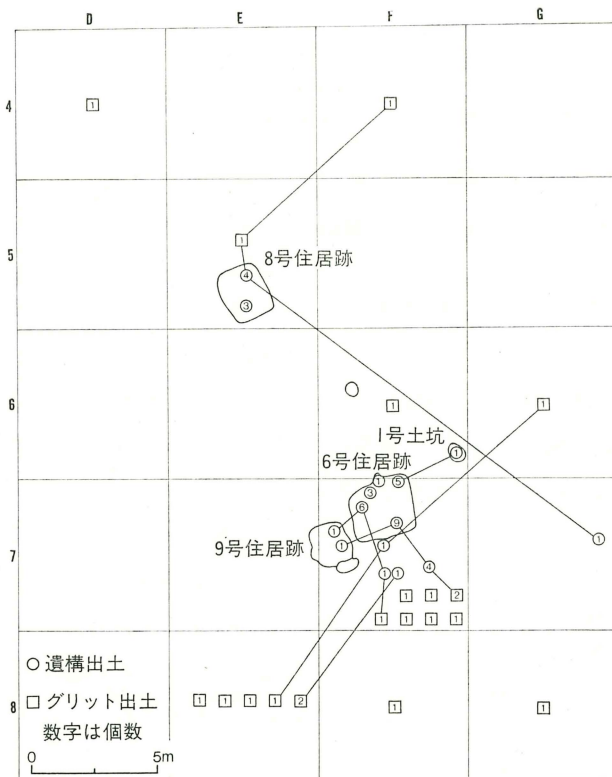
住居跡出土の瓦について検討される機会は少なかったが、緑山遺跡では検討に価する丸瓦・平瓦が出土しているので、技法を中心に述べ関連する問題について触れてみる。

1. 出土状況

瓦の総破片数は55点で個体数は丸瓦3、平瓦6以上が確認できた。瓦の出土した遺構は4号・6号・8号・9号住居跡とF-6の1号土坑である。4号住居跡は縄文時代であることから除外できる。F-6区1号土坑の1点は6号住居跡の5点と接合しており、9号住居跡の2点が6号住居跡6点、9点とそれぞれ接合したことから、瓦は6号と8号住居跡に伴うと思われる（第123図）。

瓦の総破片数をグリット別に分けてみるとE-5・F-7・E-8区に多いが、F-7・E-8区出土の瓦も、6号住居跡から散乱した瓦と考えられる。同様に須恵器の総破片をグリット別になると、D-5・6・7、E-6・7、H-5区など瓦の出土していない地区にも多いが、これは糸切りを持つ新しい時期が含まれるためである（第124図）。

住居跡内での瓦のあり方は、6号住居跡では平瓦7（以下丸瓦・平瓦の後に付く番号は、第114～第117図の瓦



第123図 緑山遺跡の瓦出土地点と接合関係

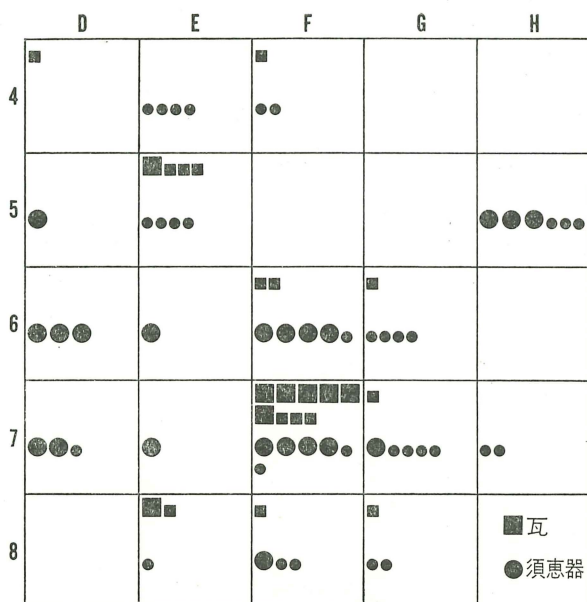
の番号を表わす)あるいは平瓦8、丸瓦1・3が竈付辺に集中する傾向が見られ、竈の袖などに使用されたのであろう。8号住居跡では西隅の焼土近くに集中しているが、竈のない住居址であり、使用方法については不明である。

2. 瓦の特徴

当遺跡出土の丸瓦・平瓦について、製作順序に従って述べることにするが、平瓦については厚手をA類、薄手をB類に分けた。胎土分析については瓦とともに土師器・須恵器・埴・粘土を分析に出したので、比較しながら述べる。

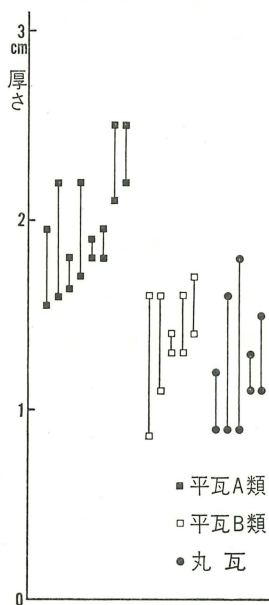
(1) 胎土

肉眼での表面観察によれば、ほとんどの瓦に動物遺体と考えられている白色針状物質⁽¹⁾が含まれているのが特徴である。1cm²で1から8個が確認できた。このことは母体となった粘土が同一であ



第124図 瓦・須恵器グリッド別出土量 大は5個小は1個
して、確認できなかった不透明鉱物が多量に検出できることは、上記のことを裏付けている。

また須恵器に角閃石族が少なく、土師器に多い特徴が指摘され、瓦は土師器・須恵器それぞれに近い例が見られた。角閃石族の中でも特に緑色普通角閃石に差が見られ、緑山・立野・桜山遺跡の須恵器のいずれも少ない傾向にあった。それに対して瓦・土師器・立野遺跡の埴には多く認められた。この傾向は緑レン石についてもうかがえる。



第125図 瓦の厚さ

った可能性を示唆している。また、黒色に見える0.05cm以下の角閃石を含んでいるほか、0.2~0.3cm以下の石英など砂粒を含むが、平瓦6・7・9のように砂粒がやや少なく、粘性を持つ例もある。

重鉱物分析の結果では、須恵器に不透明鉱物が多く瓦・土師器と少なくなる傾向が見られる。これは分析資料No.15（付編参照）の緑山遺跡8号住居跡粘土が、土師器と同様な値を示していることや、須恵器の中でも器肉の薄い坏類に多いことから、焼成温度の差による融解鉱物の増減と考えられる。No.15の粘土を1,200°Cで2時間焼成して分析した結果、斜方輝石と緑色普通角閃石が激減するのに対

今回の鉱物分析では今後の課題が多く、結論の出せる段階まで至っていないが、動物遺体を含むことから、瓦・須恵器・土師器などいずれも岩殿丘陵付近で製作されたであろう。緑山遺跡8号住居跡で多量の粘土が検出されているが、このような状況は立野遺跡でも見られたため、須恵器か瓦製作用の粘土の可能性を考えた。しかし、肉眼では動物遺体は確認されず、珪藻も検出されなかった。このことは、直接土器の母体となった粘土ではないと考えられるが、粘土の検出状況、竈のない住居跡から出土したことを考え合わせると、瓦・須恵器製作用の粘土の可能性も捨て去ることはできない。緑色・普通角閃石、緑レン石の割合から、瓦は須恵器よりも土師器に近いことが指摘できる。立野遺跡の埴は、須恵器と同一の窯で焼かれているが、胎土は緑山遺跡の瓦に類似している。このように須恵器と瓦は別の粘土採取地が考えられる。

(2) 模骨への粘土の巻きつけ方法

粘土塊からの切り離し痕と考えられる糸切りの確認できるのは、平瓦7・8・9・10と丸瓦1であるが、平瓦は厚手のA類にのみ見られ

る。

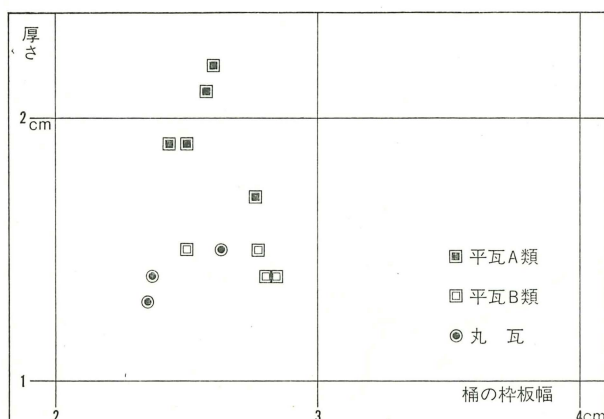
糸切りの方向と弧について検討するが、糸で切り離す前は瓦の糸切りの残っている凹面が、粘土塊の上面になっていること、そこには前の瓦製作のために切り離れた糸切り痕が残っていることが条件となる。平瓦8は広端部から入り右側縁部へと抜ける、左手を支点にした弧を描く。平瓦9も右側縁部から狭端部へ抜ける左手支点の弧を描く。同様に、丸瓦1も広端部から狭端部へ左手支点の僅かな弧を描く。このように、いずれも粘土塊から切り離れた粘土板の上面を模骨に接着したと推測できる。しかし平瓦8と9の糸切り導入部が90度違っていることから、模骨に粘土板一枚を一周に巻きつけたのではなく、小さな粘土板を2～3枚継ぎながら巻きつけたと考えられる。仮に平瓦8が一枚の粘土板桶巻造りで4枚割りとした場合、糸切りが広端部から入っているため、広端部幅31cmの4倍、124cm幅を糸切りの導入部としなくてはならない。埼玉県桶巻造りの瓦の場合、弧を描く糸切りが多く、粘土板継ぎ合わせ桶巻造りが主流であったと考えられる。次に丸瓦1は僅かな弧を描くが側縁部に並行しており、仮に一枚の粘土板を巻きつけたとするならば、広端部幅23.5cmの2倍の47cm幅となり、糸切りの導入部として可能な幅であろう。事実平瓦の糸切りが導入後すぐ曲線を描き、それも滑らかな曲線であるのに対して、丸瓦の糸切りはほぼ直線であるが、力の配分のためか細かな蛇行を描く点で、一枚粘土板の巻きつけと考えられる。

次に平瓦Bの巻きつけ方法について検討しておく。この瓦の割れ方は狭端部から見るにZ型に、側縁部から見るに凹面上部から凸面下方へ斜めに割れている。短い粘土紐あるいは小さな粘土板を下方から上方、左から右へ積み上げたと考えられる。

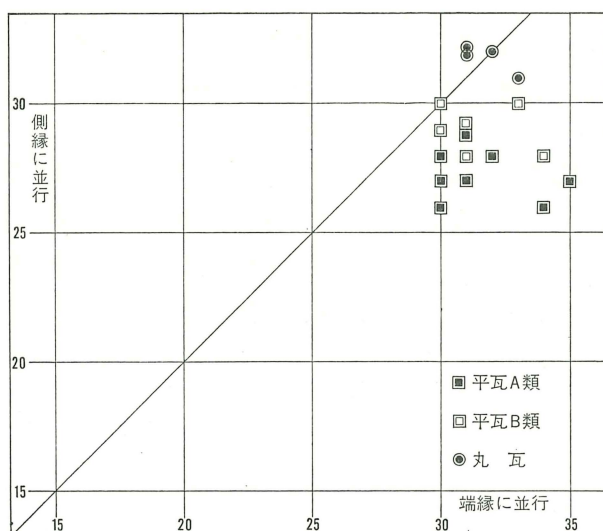
次に平瓦AとBの厚さを比較するとAは1.55cmが最も薄く、最大厚2.5cmある。Bは0.85cmから1.7cmと、Aよりも薄いつくりであることがわかるが、これは模骨への粘土巻きつけ方法が糸切り離し粘土板であるのか否かに原因があると考えられる(第125図)。

平瓦AとBの厚さを比較するとAは1.55cmが最も薄く、最大厚2.5cmある。Bは0.85cmから1.7cmと、Aよりも薄いつくりであることがわかるが、これは模骨への粘土巻きつけ方法が糸切り離し粘土板であるのか否かに原因があると考えられる(第125図)。

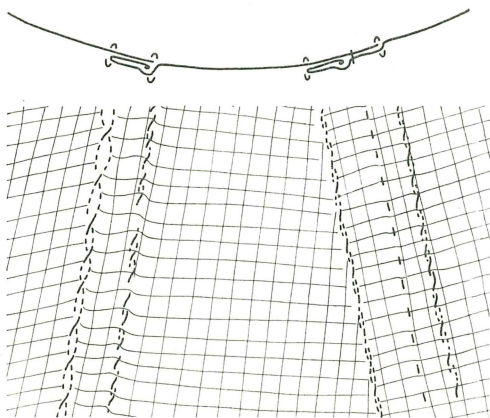
(3) 枳板痕



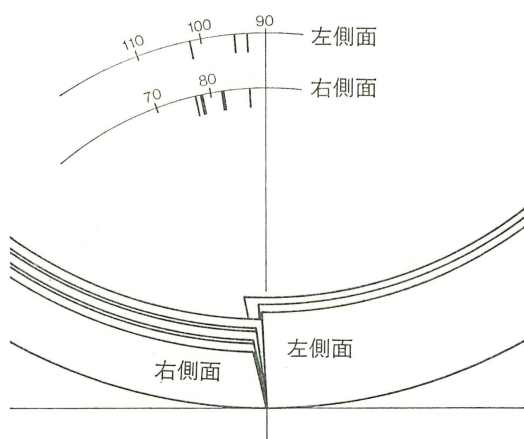
第126図 緑山遺跡出土瓦の桶枳板幅と厚さの関係



第127図 緑山遺跡出土瓦の布目数



第128図 丸瓦の布の綴じ方



第129図 平瓦側面の凸面に対する分割角度

平瓦8では板杵痕が12枚確認でき、4分割と考えられるので1周48枚前後の板が使われたであろう。丸瓦では2・3とも杵板痕は9枚確認できるので、18枚前後の板が使われたであろう。

杵板の幅は平瓦8で1.7cmから3.3cm、丸瓦2で2.1cmから2.7cm、丸瓦3で2.1cmから3.2cmであった。それぞれの瓦の杵板幅の平均をとると、平瓦Aは2.4cmから2.6cmの間に、平瓦Bは2.8cm付近にある。また丸瓦は平瓦よりも幅が狭い傾向にある。

瓦の厚さと桶杵幅には相関関係があるのではないかと作成したのが第126図であるが、結局厚さと桶杵幅に関連は見られないようである。県内でも古いと考えられる平谷窯跡・大谷窯跡の平瓦は杵板幅が4cmを越え、一部に5cm以上の例がある。しかし700年前後から国分寺創建頃までの馬騎の内・荷鞍ヶ谷戸・岡・寺山・五明などの平瓦は2.4cmから3cm前後にあり、緑山遺跡例もこの中に含まれるようである。

(4) 布糸目数 (第127図)

布糸目数の縦・横の計測をおこなったが、緑山遺跡平瓦A・B類に僅かな差がみられ、後者

の方が側縁に並行する糸の数が多い傾向にある。丸瓦は平瓦よりも側縁に並行する糸の数が多く、端縁・側縁の数が31以上となりほぼ同数に近づく。

(5) 布の綴じ合わせ (第128図)

綴じ合わせの見られるのは、平瓦9と丸瓦3である。平瓦9の綴じ合わせ方法は糸が現われていないため不明確であるが、丸瓦3は2ヶ所に見られる。2ヶ所とも同様な綴じ方で、布の両端を片方は折り曲げ、片方は延ばしたまま、その両端をとめるため一端から縫い、また戻って同一のところを前の糸をからめながら縫う、返し縫いをおこなっている。この縫い方だと、往復した糸が右回りの螺旋状になる。二ヶ所のうち一方は、折り曲げた布の幅が広いので、中央を縫い付けている。

(6) 凸面の叩きと撫で

凸面の叩きの文様には長方形斜格子 (第131図—2) の丸瓦1・2・3・4と、平行 (第131図—6) の平瓦6・9および平行に大きな斜格子を重ねた叩き (以下平行斜行格子組み合わせ文・第131図—4) の平瓦8・17・18の3種が確認できた。長方形格子は丸瓦のみに、平行は平瓦A類の一部にみられたが、平行組み合わせ文は平瓦A類・B類それぞれに1例ずつある。叩きの円弧につ

いては撫でられているため不明である。撫では幅約7 cmの篋状工具で、横位に撫でている。方向は狭端部を上にした場合平瓦が右・左両方あるが、丸瓦は左から右である。

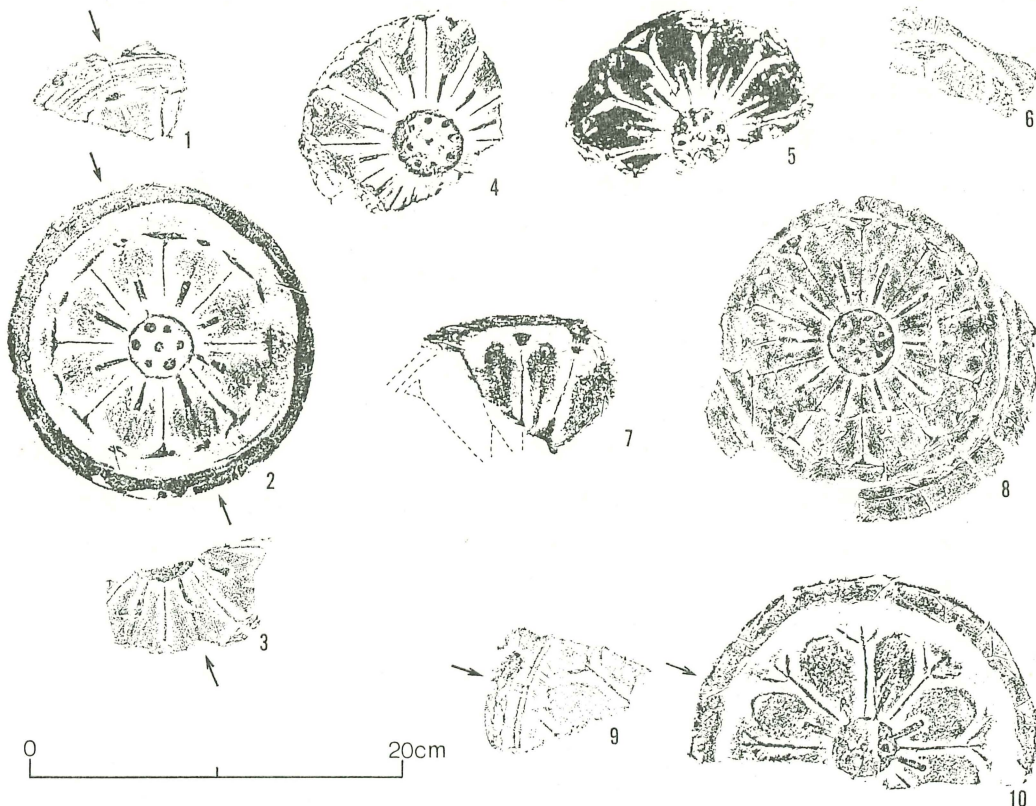
(7) 分割と側面・端面の面取り

平瓦で側面の凸面に対する分割角度を見るに、右側面は90度以下、左側面は90度以上ある(第129図)。このことは円筒から分割する際に、凸面側から右利きの人が切ることにより、刃先がやや左へ寄ったためと考えられる。これはすなわち、円筒から分割する時、切れ込みを入れて割ってから整形したのではなく、短時間の乾燥後、円筒に直接刃物を入れて分割したためだと思われる。実際平瓦の面取り部分は砂粒が走るのに対して、側面は光沢を持つ平滑な面を成している。また側面は直線に切られていることから、当て木を使って切断したと考えられる。

側面の残るうち面取りの見られない例は、平瓦6・9だけである。また凹面側だけに見られる例は平瓦17であり、ほかは凹凸両面に見られる。方向は狭端部から広端部へ削られている例が多いが統一されてはいないようである。

3. 勝呂廃寺出土瓦との比較

浜戸市勝呂廃寺は緑山遺跡の南東4.3 kmに位置するが、同廃寺については林織善氏⁽²⁾・田中一郎氏⁽³⁾・織戸市郎氏⁽⁴⁾などの紹介・論考がある。1978年に勝呂廃寺へ供給したと考えられている、上宿瓦窯跡が発掘され、1979年以降の範囲確認調査では基壇の一部・溝・回廊状遺構が発見された。また遺



第130図 勝呂廃寺第1期の軒丸瓦とその類例 1・3~7・9.勝呂廃寺 2・10.赤沼窯跡 3.大谷瓦窯跡 矢印は同範位置を示す。

物は多量の瓦⁽⁵⁾のほか、銅製と考えられる塔相輪が出土している。緑山遺跡の瓦と比較すると類似する例があり、両者の有機的関連を追求する材料とするため検討する。

(1) 勝呂廃寺の瓦 (第134図)

勝呂廃寺には各種の軒丸・軒平・丸・平瓦が出土しているが、それぞれ類別して時期区分を行ってみる。丸・平瓦については叩き文様と整形技法によって分類する。現段階ではまだすべての瓦当文様・叩き文が出土していないと考えるので、時期区分については時期早尚と考えるが、あえて行ったのは、緑山遺跡出土瓦との関連を知るためである。なお類別番号は第134図と同じである。

a 軒丸瓦 (第134図)

第1類 (第130図—4～5)

棒状の子葉を持つ単弁蓮華文で、8葉・10葉⁽⁶⁾・12葉が見られる。花卉は中央に稜を持ち、弁端は尖形の反転がある。周縁は直立縁であろう。類例は東松山市大谷瓦窯跡⁽⁷⁾にあるが、10葉で花卉は僅かに丸みを持ち扁平となる (第130図—8)。この類は子葉を取ると花卉の反転・周縁の直立縁・中房の小さい点など、飛鳥寺系の瓦に類似しており、注目される瓦である。この類はいずれも白色針状物質が入る。

第2類 (第130図—1・3)

単弁8葉であり、子葉を持つこと、花卉に稜があることなどが第1類と共通する。しかし花卉の端部の反転が楕円形で表現され、周縁が三角縁となる点で相違している。この瓦も第1類と同様、飛鳥寺系の変形種⁽⁸⁾と考えられる。類例は鳩山町赤沼窯跡 (第130図—2) に見られるが同范と考えられ、製作地を赤沼窯と推考できる。

第3類 (第130図—9)

花卉は扁平で棒状の子葉を持つ単弁8葉の瓦であるが、大形となる。弁間の界線先端部は鳥足状に三叉に分かれる。周縁は三角縁状になり、胎土に白色針状物質が入る。類例が鳩山町赤沼窯跡 (第130図—10) から出土しており同范と考えられ、第2類と同様製作地のわかる瓦である。

第4類 (第130図—7)

単弁の15葉と考えられていた瓦であるが、1つ置き of 弁の間に変形した子葉と思われる三角形の突起がある。すなわちこの瓦は複弁8葉と考えられ、複弁の間に子葉状の突起を持つ変形な瓦である⁽⁹⁾。花卉は中央に鋭い稜を持ち、弁端は反転気味である。白色針状物質を含む。瓦当部径が丸瓦径より大きく、接合部が瓦当部周縁の内側にある。丸瓦部の凸面は全面に撫でているが、僅かに斜格子叩きが確認できる。凹面は桶の杵板痕が明瞭に見られる。以上の点と胎土から、後に述べる丸・平瓦第2類と同時期生産の瓦であろう。

第5類 (第135図)

周縁の傾斜部に交叉波状文を巡らす瓦で、単弁は14・15・16葉が、複弁は8葉がある。瓦当面が大きく、厚手となる。類例は岡部町寺山遺跡から小形の複弁8葉が出土している。白色針状物質が入らず須恵質が多い。

第6類

単弁8葉で、弁には界線が巡り、間弁は先端で弁に沿って大きく広がり、楔状となる。類例は武

蔵国分寺に見られる。白色針状物質が入らず須恵質である。

第7類

宝相華文の変形文と考えられ、花卉は4葉で、子葉の変化したと思われる線が中房まで達し、十字線をつくる。弁間には葉状の間弁が入る。この瓦の類例も武蔵国分寺に見られる。

b 軒平瓦 (第134図)

第1類

三重弧で型挽きの瓦である。顎の深さは瓦当厚と同じくらいの中顎である。

第2類 (第131図—3)

瓦当文様を長方形斜格子叩きで施した深顎の軒平瓦である。顎部は平行斜格子組み合わせ叩きが施される。この平行斜格子組み合わせ文は緑山の平瓦にある。

第3類

顎はやや深い段顎の三重弧で、範型と考えられる。三重弧文の出土例はやや少ない。

第4類

浅顎の五重弧で、範型である。杵板痕が明瞭につく。同類が大仏廃寺にあるが、縄叩きが施されている。

第5類

重廓文の軒平瓦で、曲線顎を持つ。凸面には文様としての小さな正格子叩きが部分的に施される。

第6類

縦に4つ並ぶ長方形格子文で、同一文様が赤沼窯から発見されているのを見ると顎の深い段顎⁽¹⁰⁾になっている。織戸市郎氏は重弧文系としている。

第7類

左から出る扁行唐草文で、文様の間には珠文が散る。顎は浅い段顎である。

第8類

唐草文の変形と考えられる蔵文が上と下から出ている。顎はやや浅い段顎となる。

第9類

篋で外区との界線を描き、内区に×を横に連続する刻線文様で、顎は段顎である。類例は武蔵国分寺と谷津池第3号窯にある。

第10類

小さく反転する均整唐草文で、脇区に2本の横線が入る。武蔵国分寺に同範がある。

第11類

反転する波状の文様が連続するが、類例は新久窯跡に見られる。

c 丸・平瓦 (第134図)

第1a類 (第131図—5)

糸切り痕と杵板痕が明瞭に残り、平行叩き文が施される。平行叩きは荒く5本で2cmの幅があり、叩きの上に横位の撫でを施す。同型叩きは緑山遺跡の平瓦A類とした中にあり、両遺跡例とも杵板幅は2.5～3cmで、勝呂廃寺出土瓦のうちでは狭い方である。また布糸目数は3cm幅で30×26以上

で最も細かい部類にある（第133図）。生産跡として赤沼窯跡から同類の叩きが出土している（第131図—7・8）。

第1b類

5本で1.3cmを測り、第1a類より細かな平行叩きである。叩き板には細かな木目が入り、目の走る方向に対して右下りに彫られている。杵板痕も明瞭で、糸切りは端部に並行に走る。杵板幅は2.3cmと2.8cmがあり、第1a類・緑山遺跡平瓦などとほぼ同じであるが、布糸目数は少なくなる。

第1c類

5本で0.9cmのさらに細かい平行叩きである。これもb類と同様糸切り痕が端部に並行する。

第2類（第131図—1）

丸瓦であるが、糸切り痕と杵板痕が認められ、細かな斜格子文が施される。同型叩きは緑山遺跡の丸瓦にある。杵幅は2.3～2.4cm強あるが、緑山・勝呂の平瓦類より狭い。

第3類（第131図—3）

平行・斜格子組み合わせ文である。勝呂では軒平瓦第2類に見られるが緑山の例から平瓦にも存在すると仮定して類別した。

第4類

長方形格子で縦横3単位が4.3×3.2cmと荒い。杵板痕があり、その上を撫で消す例がある。また叩きの上も同様に撫でられている。

第5類

凸面は木目の浮き出た平行叩き文が、凹面は青海波文が施された、須恵器と同一技法の瓦と考えられる。小破片のため問題は残るが、一面が直線で片面が〰状になること、馬騎の内廃寺にも同類の瓦があるので平瓦と考えた。焼成・胎土は、軒丸瓦第5類に類似する例がある。

第6類

5本で1.9cmの荒い縄叩きを消した後、4.5×4.3cmに5個ずつ入る格子叩きを施す。格子叩きはまばらに打たれていることから、文様の叩きと考えられる。

第7類

5本で1.2cmの細かい縄叩きを不定方向に施し、その上を撫でている。凹面は杵板痕の上を縦方向に撫でている例がある。

第8類

大きな斜格子叩きで、1個が菱形となる。3個の単位で2.8cmとなる。叩きの上は撫でが施され、凹面は縦方向に削られている。

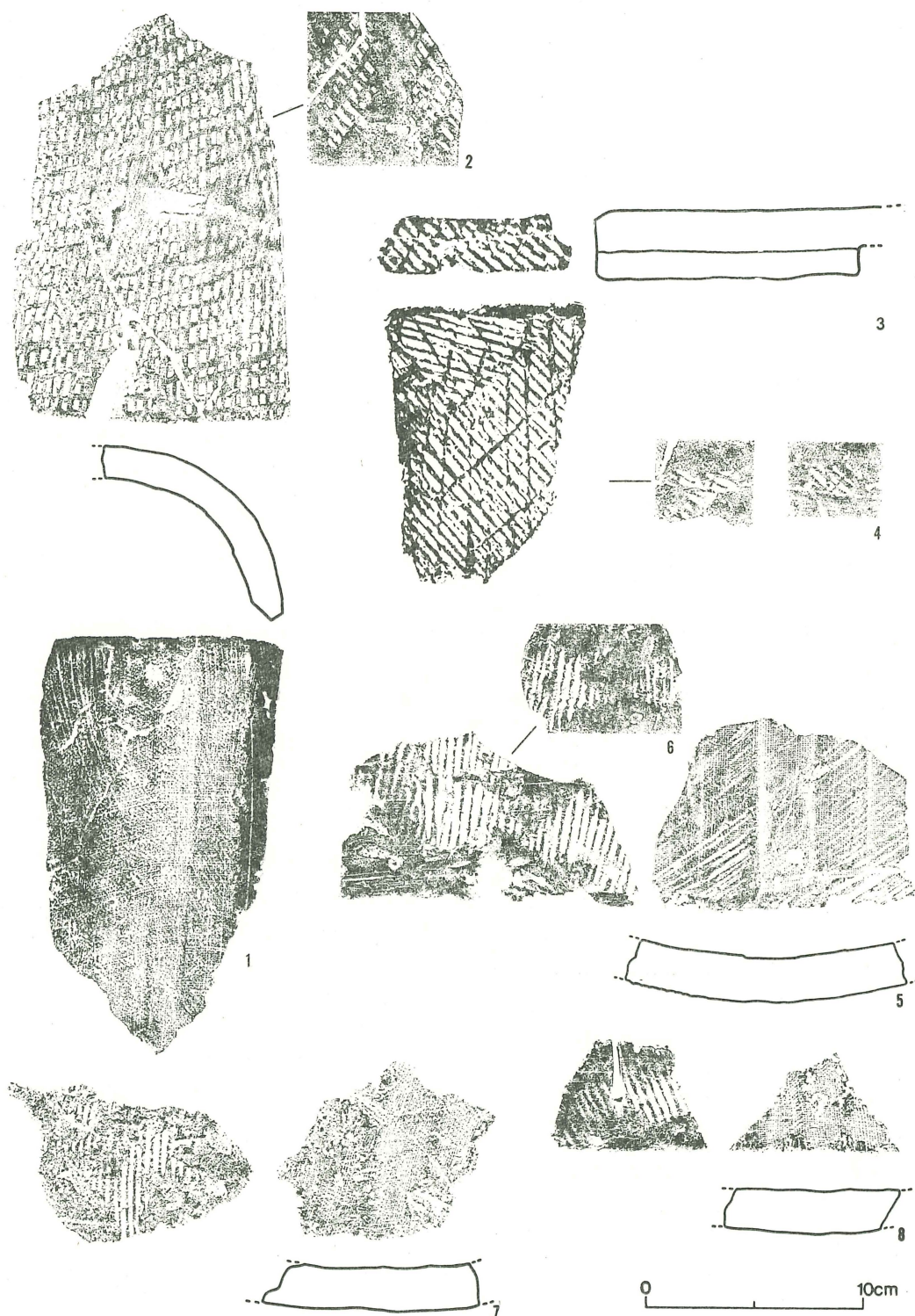
第9類

杵板痕がなく、叩きの弧から一枚造りと考えられる。叩き板は幅約11cmで、5×4個の荒い格子が刻まれている。

第10類

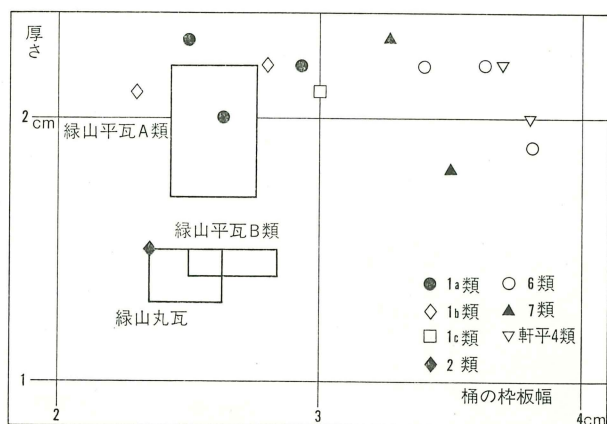
5本で1.6cmの縄叩きを全面に施す。一部に糸切り痕も残るが、一枚造りである。

(2) 緑山遺跡と勝呂廃寺の出土瓦の類似点

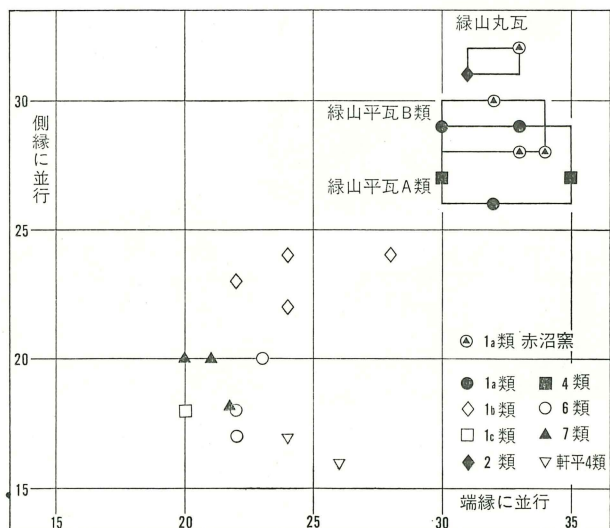


第131図 叩き文様の比較 1・3・5. 勝呂廃寺 2・4・6. 緑山遺跡 7・8. 赤沼窯跡

勝呂廃寺の叩き文様は平行（1a・1b・1c）、平行・斜格子組み合わせ文（3）、格子（9）、斜格子（2・8）、長方形格子（4）、縄+格子（6）、縄（7・10）など各種が見られる（第134図）。第1a・2・3類は緑山遺跡と同一で、同型叩き板を使用していると考えられる（第131図）。



第132図 勝呂廃寺出土瓦の桶杵板幅と厚さの関係



第133図 勝呂廃寺赤沼窯跡出土瓦の布目数

の軒平第4類、平瓦第6・7類のグループに分けられた。また側縁に並行する糸の数で31以上の第2類（丸瓦）、26～30の第1a・4類、22～24の第1b類、16～20の軒平第4類・平瓦第1c・6・7類に分けられる（第132・133図）。

このように勝呂廃寺と緑山遺跡の瓦は、上記の事例から同一グループに含まれることがわかった。また白色針状物質を含み赤褐色である点からも、同一工房において製作されたと考えられる。

第1a類と同型の平行叩きを持つ平瓦が赤沼窯跡から出土しているが（第131図－7・8）、叩きの上に篋撫⁽¹¹⁾でを施すこと、糸目数が第1a類と同一グループに含まれること、白色針状物質を含むことなどから、赤沼窯跡が勝呂廃寺の瓦窯跡の一つと考えられる。

次に勝呂廃寺の瓦の杵板幅と厚さを計測して、緑山遺跡例と比較すると、平行叩き文系（1a・1b）が緑山遺跡平瓦A類と近い値を示す。軒平第4類と平瓦第6・7類は、杵板幅が3.2 cm以上となり明らかに差が認められる（第132図）。

布糸目数は、緑山遺跡と同型叩き文である第1a類が緑山遺跡A類と同一の範囲に含まれた。また第4類も同様であった。杵板幅と厚さで第1a類と同様な位置にあった第1b類は、糸目数では全く違う範囲を形成している。また第1c類は杵板幅では3 cmとなり第1a・1b類に近い範囲にあったが、糸目数では最も荒い布を使用している。軒平第4類と平瓦第6・7類は糸目数でもほぼ同一のグループとなるようである。第2類の叩きは勝呂・緑山とも丸瓦のみに使われ両者とも糸目数は近似する値である（第133図）。また第2類と同一の叩きが勝呂廃寺軒平瓦第4類にみられ、布目数も第2類とほぼ同一である。

杵板幅から3 cm以下の第1a・1b・1c・7類のグループと3.2 cm以上

ではこの種の瓦は、勝呂廃寺出土瓦の系譜の中でどの位置に置かれるのか検討してみよう。

(3) 時期区分

類別した瓦で、軒丸瓦を主体とした時期区分を行なってみる（第134図）。

第Ⅰ期

軒丸瓦では第1類から第3類が含まれるが、中でも第1類は瓦当部が薄く、瓦当部と丸瓦部の接合部分の粘土が少なく、古式であろう。第1類には8葉・12葉のほか10葉も見られる（第130図—5）。第3類は瓦当部が厚く、弁が扁平であるなど新しい傾向を示す。軒平瓦は型挽きの第1類が伴うと考えられるが、やや顎の浅い中顎であるため今後の検討が必要である。時期について、軒丸瓦の系譜から推考してみる。第1類の子葉を取ると飛鳥寺系の瓦（石田茂作氏第三類⁽¹²⁾）に類似することは、すでに高橋一夫氏も述べている。この考え方が支持できるのは、第2類の軒丸瓦も弁端が反転を表わす楕円形の脹らみを持ち、飛鳥寺系に類似するからである（石田茂作氏第六類）。第1・第2類の瓦を他系譜の中でとらえようとするならば、はたしてこのような瓦当文は出現しうであろうか。第1・第2類および大谷瓦窯跡・赤沼窯跡のこの種の瓦のいずれもが、飛鳥寺系の素弁の瓦を母体としながらも、棒状の子葉を加えた点が大きな特徴といえる。

子葉の流行は奈良県山田寺系瓦の地方伝播に始まるが、関東では千葉県竜角寺跡、群馬県上植木廃寺が知られている。竜角寺の創建は天智朝以後、下っても天武朝と考えられているが、上植木廃寺について大江正行氏は、山田寺系譜と考えるよりも、中国意匠の影響を考え、創建年代を7世紀中頃としている⁽¹⁵⁾。筆者は上植木廃寺例について、山田寺直接系譜でなく、南滋賀廃寺の単弁軒丸瓦などにその系譜が求められ、伝播した時期は大津宮以降と考えたい。そのようなルートがあったからこそ、後に南滋賀廃寺にあった瓦当背部に布目の付く一本造りが伝播したのであろう。

このように関東への子葉を持つ瓦の伝播は天智朝以降と推定できるならば、勝呂廃寺の軒丸瓦第1類は飛鳥寺系の瓦（寺谷廃寺の瓦など）を母体に7世紀第3四半期に造られた瓦と推考できる。しかしその出目については、後に述べるように渡来人との関連が指摘できる。

この時期の瓦生産は、瓦に白色針状物質が含まれていることから、赤沼窯跡をはじめ南比企丘陵で行なわれたであろう。

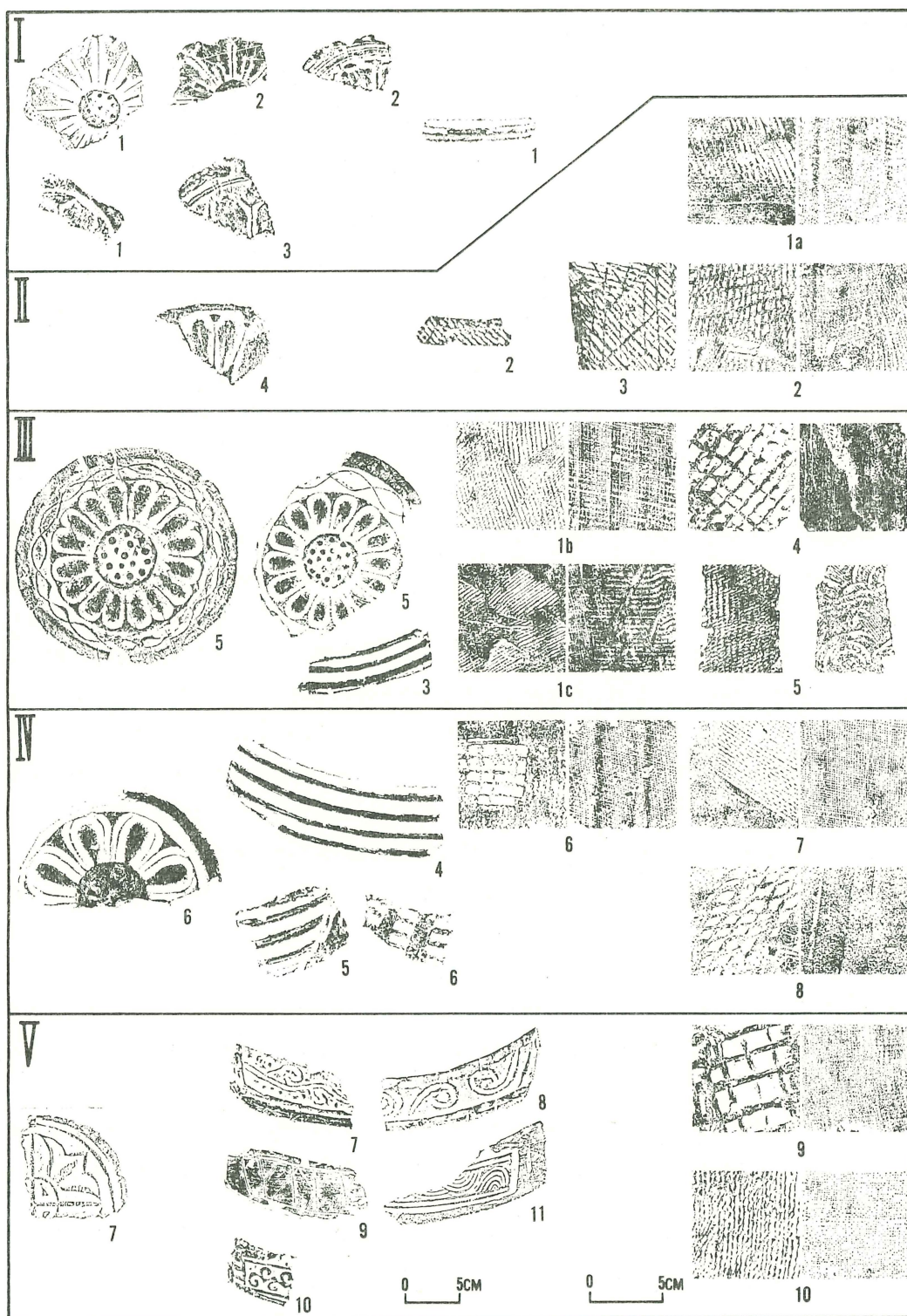
第Ⅱ期

軒丸瓦の第4類が基準となる。前にも触れたようにこの瓦の叩き、桶梓板、布目数が緑山・勝呂出土の丸・平瓦第2類に類似する。その時期は緑山遺跡から8世紀第1四半期に1点を置くことができる。

緑山遺跡に隣接する立野遺跡には、住居跡から竈に転用された瓦埴が数点出土しており、7世紀末から8世紀初頭の時期であることを考慮すれば、その埴は勝呂廃寺へ供給されるべきものであったと考えられる。⁽¹⁸⁾

軒平瓦は丸・平瓦第2類の長方形斜格子を叩いて瓦当文の代用としている。丸・平瓦は1a・2類であるが、緑山遺跡のいずれの瓦もこの時期に入る。第Ⅰ期と同類の大谷瓦窯跡の瓦と緑山遺跡の瓦を比較すると、丸・平瓦とも前者の方が厚い傾向にあるが、寸法はほぼ同じである。

この期の丸瓦は粘土板桶巻き造りである点が特徴であり、瓦のほとんどに白色針状物質を含んで



第134図 勝呂廃寺出土瓦の時期区分 数字は軒丸、軒平、丸・平瓦別の類別番号

いる。

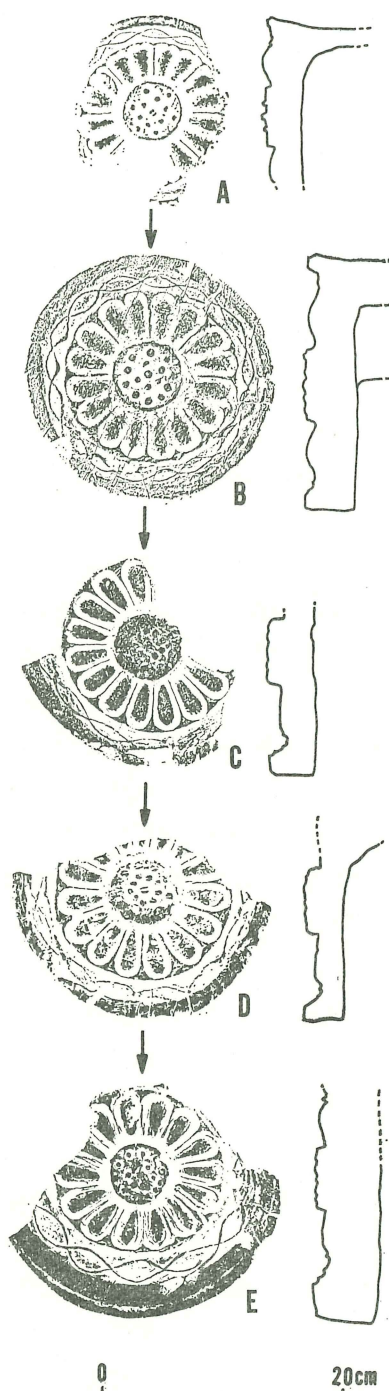
第Ⅲ期

交叉波状文を持つ単弁あるいは復弁瓦（第5類）に代表されるが、この瓦を国分寺創建期並行に置く見解もある。⁽¹⁹⁾しかし第Ⅳ期に代表される武蔵国分寺創建期の単弁瓦（第6類）と交叉波状文を持つ瓦が、勝呂において最も多く出土する型式である点からも、同時に存在したとは考えられず、また国分寺創建・再建瓦と深い関わりのあった勝呂廃寺から、なぜ一方の交叉波状文軒丸瓦だけが国分寺に行かなかったのか疑問である。以上のことから軒丸瓦第6類の前段階に置くことが妥当であろう。

交叉波状文の系譜を引く瓦で小形品が岡部町寺山遺跡にある。⁽²⁰⁾この瓦に伴うと考えられる平瓦も小形であるが、板目に斜行する斜格子叩き（5単位が3.7cm幅で、1単位が菱形を呈する）が施され、叩きを板状工具により撫で消したり、凹面の桶杵板痕を撫で消す例がある。この技法は勝呂廃寺の第4類に類似している。また糸切りが端縁に並行している点も、勝呂廃寺平瓦第1b・1c類に類似している。

ここで岡部町寺山遺跡例も含めた交叉波状文軒丸瓦の系譜について触れてみたい（第135図）。勝呂廃寺の復弁8葉軒丸瓦（B類）は蓮子が1+5+10で、交叉波状文の単位数は16である。寺山遺跡の瓦（A類）は波状文が同数であるが、蓮子が1+6+6となり、面径も小形である。また復弁の弁端それぞれに反転が表現されている点も違う。寺山遺跡の瓦は精緻な作りであり、弁の高さも中房や外区よりも高く、蓮子も立体的な作りであることから、勝呂廃寺の復弁8葉軒丸瓦よりも先行すると考えられる。寺山遺跡復弁8葉軒丸瓦の先行形態については不明確であるが、弁の反転については勝呂廃寺第Ⅰ期に見られるように、当地域では案外容易に模倣できたかもしれない。

交叉波状文軒丸瓦A類からB類へ面径が大きくなった後は、勝呂廃寺内で面径の大きなまま単弁に変化する（C類）。弁数は16葉となり、復弁を分解した数と考えられる。波状文の単位も16から14に減少し、蓮子も1+9+9に変化する。B類までは立体的なつくりであったが、C類に至って弁と蓮子は低くなる。



第135図 勝呂廃寺交叉波状文軒丸瓦の変遷図 Aは岡部町寺山遺跡

D類は単弁15葉と減少するとともに、波状文も復元であるが13と少なくなる。しかし蓮子は変化しない。この類以降は弁の割り付けが歪むとともに、作りが悪くなる。このような変化が段階的につかめることは、時期差と考えられる。

E類に至っては単弁14葉となり、蓮子が1 + 6 + 11と変化する。波状文は12となり、波状文の振幅が大きくなる特徴を持つ。また中房と内区の径が、僅かに縮小する。

先にも触れたように、交叉波状文系軒丸瓦が国分寺創建瓦より遡ると考えられ、その最終様式がE類とすることができる。交叉波状文の変遷を5段階と数えるならば、寺山遺跡や勝呂廃寺のA類とB類の瓦は、第Ⅱ期の初頭、8世紀第2四半期初頭と考えたい。

軒平瓦は第3類の範型三重弧文が伴うと考えられる。平瓦は第1b・1c類の平行叩きや第4類の長方形叩きが伴い、第5類の須恵器と同技法の叩きは、軒丸瓦第5類に同様の焼成・色調がみられることから、この時期に入れてよいと考える。

この期の瓦の胎土を見ると、軒丸瓦第5類は白色針状物質を全く含まず、平瓦第4類も同様である。それに対して第1b・1c・5類は白色針状物質を含むので、生産地の違いが考えられる。

第Ⅳ期

軒丸瓦第6類に代表されるが、軒平瓦は第4・5・6類が、平瓦は第6・7・8類がある。多くは武蔵国分寺に見られ、軒丸瓦第6類は有吉重蔵氏が上野系(Ⅰ)あるいは上野系の文様意匠を継承した国分寺系とした瓦⁽²¹⁾(Ⅱ)に類似している。国分寺では三重弧が伴うと考えられているが、勝呂廃寺では三重弧は二点が紹介されているだけである。他に五重弧(第4類)、重廓文(第5類)があり、前者の同類が大仏廃寺から出土して、荒い縄叩きが施されている。国分寺系の瓦とセットになるとは断言できないが、ほぼ同時期の所産と考える。軒平瓦第6類が赤沼窯跡から出土しており、生産地の一ヶ所がわかるが、軒丸瓦第6類には白色針状物質を含まず、軒丸・平瓦にも含まない例が多い。この時期までが平瓦に桶梓板痕が見られる。

第Ⅴ期

第7類の軒丸瓦を代表とするが、軒平瓦は第7・8・9・10・11類と多種にのぼり、平瓦は第9・10類がある。多くは武蔵国分寺に見られ、平瓦第10類は新久窯跡に類例がある。軒丸瓦第7類は武蔵国分寺の宝相華文軒丸瓦の系譜を引いていると考えるが、軒丸瓦第7類の類似例は上植木廃寺にも見られる。また第9類の篋描き軒平瓦も上野にあり、この種の瓦が上野との関わりの中から生まれたと⁽²²⁾考えられる。

当期は承和12年の国分寺塔再建以降と考えられる。この期の瓦は白色針状物質を含まず、須恵質に焼成された例が多いが、鳩山町を中心とする南比企丘陵が生産地であろう。

勝呂廃寺の発掘によれば寺域を区画する溝の上に住居跡がつくられており、10世紀後半にはすでに廃寺となっていた可能性が考えられている。

4. 勝呂廃寺の歴史的背景

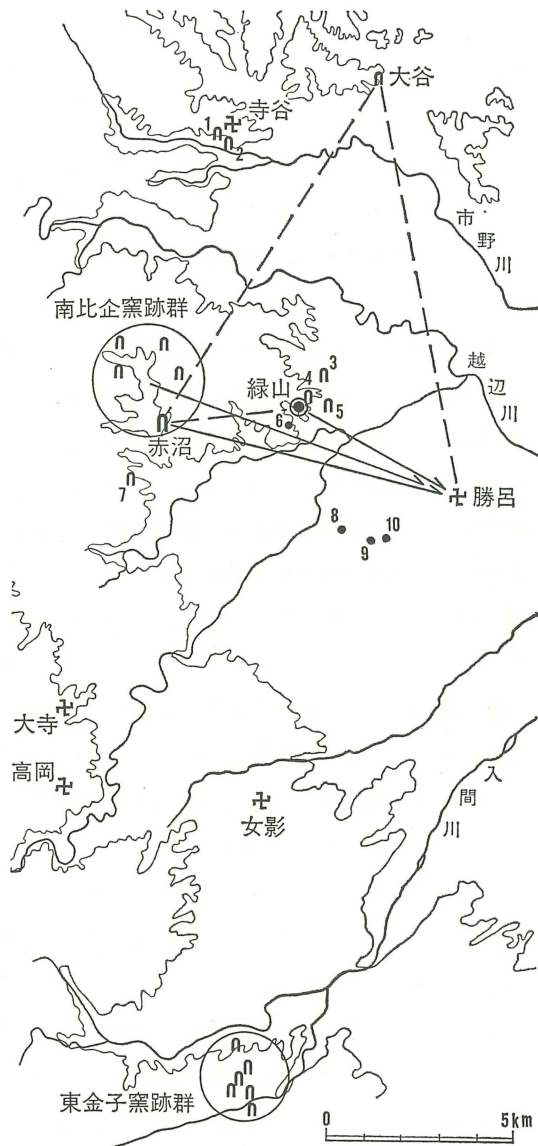
勝呂廃寺の創建期の瓦に飛鳥寺系の変形種と考えられる軒丸瓦が使用され、その供給先の一つとして赤沼窯跡が、類例として大谷瓦窯跡が見られることは注目される。また大谷瓦窯跡の西南4 kmには飛鳥寺系の素弁軒丸瓦を出土する寺谷廃寺がある。勝呂・寺谷両廃寺とも、周辺の古墳群築造

者である首長層の系譜を引く者が建立したと考えられるが、古墳築造時には須恵窯跡を保有しており、前者は桜山・根平・舞台が、後者は羽尾・平谷が知られる。このような勝呂・寺谷廃寺を含む地域は、古墳時代から西方の文物を受け入れるだけの背景があったと考えられる。一つの推測は、金井塚良一氏が想定されている武蔵型胴張り古墳を墓制とした壬生吉士氏との関連である。金井塚氏によれば武蔵型胴張り古墳は70例にのぼり、その分布地域は東松山市とその周辺地域・荒川中流域右岸段丘地域の2つが中心とされている。この広がりは大谷—赤沼—勝呂を結ぶ地域と一部重複しており、勝呂廃寺周辺では坂戸市新町古墳、立野遺跡付近の田木山2号墳が知られる。

金井塚氏は「壬生吉士氏を橘樹郡の飛鳥部吉士氏とともに、それぞれ横渟屯倉と橘花屯倉の二つの屯倉管掌者として、屯倉の設置とともに武蔵に移住した、渡米集団と考え」られている。これについては原島礼二氏も同様な見解を示されている。

岸俗男氏は、古代の「べ」の称呼を表示する用字として「部」と「戸」があり、「戸」は渡来氏族に対して6世紀代に中央権力が編戸して支配することによって生まれた称呼であり、飛鳥戸、橘戸、八戸等は日本における「戸」の源流としての意義をもつとされた。⁽²⁵⁾この中で武蔵の飛鳥部をとり上げているが、武蔵の飛鳥部氏は景雲2(768)年、白雉を獲て献じた橘樹郡の飛鳥部吉志五百国と、天平6(734)・11(739)年の正倉院調布にみえる、男衾郡鵜倉郷の飛鳥部虫麻呂の二人が知られる。前者は金井塚・原島両氏の屯倉管掌者と考える飛鳥部吉士氏であり、後者は壬生吉士氏と同じ男衾郡に居住していた。両地域に渡来集団がいたと推定できうるならば、それぞれに分布する注目できる瓦が存在する。

一つは先に述べてきた飛鳥寺系の軒丸瓦に子葉を加えた、大谷・赤沼瓦窯跡、勝呂廃寺に分布する単弁軒丸瓦であり、他の一つはかつての橘樹郡であった。川崎市高津区影向寺出土の⁽²⁶⁾二種の単弁8葉軒丸瓦である。影向寺出土の一種



第136図 寺院、古墳、窯跡の関連概念図

- | | | |
|-----------|---------|---------|
| 1. 平谷窯跡 | 2. 羽尾窯跡 | 3. 舞台窯跡 |
| 4. 根平窯跡 | 5. 桜山窯跡 | 6. 立野遺跡 |
| 7. 小用窯跡 | 8. 脚折遺跡 | 9. 山田遺跡 |
| 10. 若葉台遺跡 | | |

は勝呂廃寺とほぼ類似するが、子葉が僅かに太く弁端が反転しない。他の一種は、弁と外区の間に線鋸歯文を配している。

子葉を持つこの種の瓦の系譜は、先に飛鳥寺系と記して来たが、導入には男衾郡・橘樹郡に居住した渡来人がかかわっていたと推考したい。特に勝呂廃寺例のように、弁端が反転して子葉を持つ軒丸瓦は百済の故地の扶余にみられ、百済系の瓦と考えられる。⁽²⁷⁾しかし、勝呂廃寺例などの単弁軒丸瓦が直接半島から来たのか、寺谷廃寺のような素弁軒丸瓦から作り出したものか断言できない。

後に述べるように壬生吉士氏は武蔵国分寺塔再建を願い出ており、その主要窯跡の一つが勝呂廃寺創建時の窯跡とほぼ同一地域にあること、塔再建時の瓦が勝呂廃寺からも多量に出土することからも、壬生吉士氏が勝呂廃寺に深くかかわっていたと推考される。⁽²⁸⁾

勝呂廃寺第Ⅱ期には立野遺跡の埴と緑山遺跡の瓦との有機的な関連がうかがえる。両遺跡とも南比企丘陵産の須恵器を検出しており、特に前者は須恵器選別場と推考できるほど多量に出土している。また立野遺跡では小形陶棺が出土しており、寺院との関連が推測できるが、問題が派生するため、これについては後日改めて述べることにする。立野遺跡の第2・3号住居跡は $7.8 \times 6.9 \text{ m}$ ・ $7.25 \times 6.2 \text{ m}$ と、同時期の住居跡と比較しても大形である。両跡は主軸を同じくするが 1.2 m しか離れておらず、須恵器からみるに2号住居跡の方が新しい傾向を示す。立野遺跡の埴は完存に近い例で幅 17.2 cm 、残存長 52.5 cm 、厚さ $2.7 \sim 3.4 \text{ cm}$ を測り、他に角欠きをする例もあることから、須弥壇などに使用されたと考えられる。このように立野遺跡の居住者は、窯跡で製作された須恵器・埴・陶棺などの製品管理者であり、製作工房の統率者であったと考えられる。この地からさらに勝呂廃寺あるいはその建立層へ供給されたと推考される。立野遺跡の近くの田木山第2号墳は、立野遺跡と同類のかえり蓋を出土することから、須恵器生産統率者あるいはその掌握層の墳墓の可能性も考えられる。⁽²⁹⁾

緑山遺跡6号住居跡は 5 m 弱であるが、この時期としてはやや大形であり、8号住居跡からは粘土塊を検出しており、立野遺跡に続いてこちらは主に瓦工房を統率していたと想定したい。現在まで立野・緑山遺跡付近には同時期の窯跡は検出されていないが、立野遺跡における多量の須恵器を見ると、遠距離ではないであろう。

第Ⅲ期には勝呂廃寺独自の瓦当文が生まれ、軒丸瓦の胎土・技法が第Ⅰ・Ⅱ期と違っており、変革期と考えられる。祖型となる瓦が榛沢郡寺山遺跡にあり、この時点で勝呂廃寺が武蔵北部と関連を持っていたことが推測できる。同じ榛沢郡内の馬騎の内廃寺からは、平行叩きと同心円を持つ須恵器の技法でつくられた瓦が存在しているが、同類は勝呂廃寺の第Ⅲ期にもあり、平行叩きの盛行するものこの時期である。馬騎の内例の方がやや先行すると考えられるが、いずれにしろ8世紀前半代に瓦生産に須恵器工人の参画があったことが推測できる。

第Ⅳ期は勝呂廃寺と関連を持つ有力氏族が国分寺創建に協力したようで、創建時の上野系瓦の採用は、このような武蔵北部と強い関係を持った有力氏族によってなされたのであろう。

国分寺創建時の瓦窯は南比企窯跡群の新沼・金沢（以下泉井）・堺田（以下赤沼）、南多摩窯跡群の大丸、東金子窯跡群の水排・柿ノ木、末野窯跡群の赤岩などが知られているが、各窯跡から出土している郡銘瓦について検討してみる。

武蔵国府へ供給されたと考えられる磚を焼成した窯は、国分寺瓦窯跡を破壊しているという。磚の郡銘は高麗郡を除き19郡出土しており、瓦窯からは14郡が発見されている。このように郡銘瓦が多いのは、国分寺に近い地理的条件によるのであろう。やや離れる東金子窯跡群の水排・柿ノ木では10郡が発見されている。さらに北の泉井では、久良岐・橘樹を除いて18郡、赤沼では13郡がみられる。末野では多摩・秩父・那珂・榛沢の4郡である⁽³⁰⁾。このように見ると泉井・赤沼は、国分寺瓦窯として中心的役割を担っていたといえる。東金子窯跡群の位置する入間郡銘は、泉井から発見されているが、泉井・赤沼の位置する比企郡銘は東金子から発見されていないことから、泉井がより中心的位置にあったと推測できる。

この南比企窯跡群を掌握していたのが、当初からこの地で窯業生産を掌握していた勝呂廃寺と関連を持つ有力氏族であろう。このような武蔵北部の有力氏族の協力で、国分寺は創建が開始されたと考えられる。有吉重蔵氏は国分寺の創建瓦が上野系から平城宮系に変わること、その瓦が南武蔵に集中分布することは、当初の北武蔵主導型から南武蔵主導型の造営体制に変化したと考えられた⁽³¹⁾。平城宮系の瓦は主に東金子窯跡群で焼成されたようで、南比企や勝呂廃寺に見られないことは、南比企・勝呂が平城宮系の瓦に関与する系譜からはずれていたことを示す。

南武蔵の有力氏族として、高麗郡では国分寺建立前後から従三位までのぼった高麗福信が活躍を始め、建立以後は遣高麗大使の高麗朝臣大山、入間郡では入間宿禰で造東大寺次官になった物部広成、西大寺に財物を施入し、後に従五位下を追贈された大伴部赤男がいた。足立郡では上総員外介になり、武蔵国造でもあった人丈部直不破麻呂、采女掌侍兼典掃従四位下となった武蔵宿禰家刀自、従五位下で武蔵国造となった足立郡大領武蔵宿禰弟総、従五位下の多米連福雄などがいた。

勝呂廃寺第Ⅴ期に到り北武蔵にも有力氏族が台頭するようで、埼玉郡壬生氏出身で天台座主となった円澄や、男衾郡大領で二人の子の調庸前納を請うた壬生吉士福正がいた。この福正が焼亡後10年を経た国分寺塔再建を行なっているが、瓦の生産にはやはり南比企窯跡群も使っている。この時期の南比企窯跡群の瓦は国分寺とともに、勝呂へも供給され、壬生吉士—勝呂廃寺—南比企窯跡群の関係が推測できる。福正の財力の背景の一つに、南比企窯跡群の須恵器生産を想定したい。

白色針状物質の入った南比企丘陵産の須恵器は、武蔵国のほぼ全域に広がっていることが確かめられている。特に平安時代には商品としての須恵器が河川などを使って運ばれ、市などで売買されたと考えられる。それらの生産組織を掌握していたのが郡司層である壬生吉士氏などの有力者であったろう。彼らは以前からの地縁的なつながりを保ち、郡を越える関係も続いていたと考えられる。

5. おわりに

赤沼、緑山遺跡などのあった高坂丘陵は比企郡都家郷、勝呂廃寺は入間郡麻羽郷あるいは余戸郷と考えられ、大谷瓦窯跡を金井塚氏は横見郡御坂郷、原島氏は大里郡内としている。また壬生吉士氏居住の男衾郡の郡家郷は小川町付近にあてられている。このような先学の郷名比定が正しいとすれば、今まで問題にしてきた各遺跡は、各郡、各郷に渡っていることになる。

高橋一夫氏は勝呂廃寺を入間郡において有力氏族により建立された寺と考えられ、付近の瓦・奈良三彩を出土した山田遺跡や、倉庫群などを検出した郡衙的性格、豪族の館と目される若葉台遺跡との関連を推測されている。そして8世紀第2四半期に到り、氏寺から郡寺的なものへと性格を変

えていったと考えられている⁽³²⁾。

勝呂廃寺第Ⅰ期に代表される単弁の同範同系瓦が、地域を越えて存在しており、7世紀後半代におけるこのようなあり方は、壬生吉士氏に代表される渡来系氏族の同族的性格が起因していると考えられる。中心となる勝呂廃寺は、同族的意識のもとに建立された氏寺的性格の寺院と推考したい。第Ⅲ期に瓦当文と技法、胎土の上から変革があったようであるが、高橋氏が述べるように郡寺的なものへと性格を変えていったかどうか、今後の検討が必要である。また勝呂廃寺の所在地は入間郡であることは定説となっているが、郡衙的性格と目される若葉台遺跡も同郡の北端に位置することから、男衾・比企・入間郡の郡境の再検討が必要であろうと考えている。

勝呂廃寺の第Ⅱ期に関わる緑山・立野遺跡などは、製品管理者であり、製作工房の統率者の居住地と考えたが、窯と工房を含めた製作工房群を数単位掌握する、統率者であったと想定したい。彼らのような中間層を通して、須恵器・瓦が郡司層・寺院に納入されたのであろう。

脱稿後・坂戸市教育委員会加藤恭朗氏から、勝呂廃寺軒丸瓦第2類の丸瓦部が桶巻造りであるとの御教授を受けた。この点からもⅠ・Ⅱ期は製作技法・胎土の上で同系譜であり、第Ⅲ期に至り変革していることがわかる。(酒井 清治)

註

- (1) 宇津川徹・上条朝宏「土器胎土中の動物珪酸体について」『考古学ジャーナル』181・184号 1980
- (2) 林 織善「勝呂廃寺址」『埼玉史談』133号 1930
- (3) 田中一郎「勝呂廃寺跡考」『埼玉史談』811号 1961
- (4) 織戸市郎「勝呂廃寺の古瓦」『坂戸風土記』第2号 坂戸市史編纂室 1978
- (5) 田中一郎他『勝呂廃寺』坂戸市教育委員会 1981
- (6) 註(4)の図20
- (7) 高橋一夫「大谷瓦窯跡」『東松山市史』資料編第1巻 東松山市 1981
- (8) 柴田常恵氏拓本資料に「比企、今宿、赤沼、水穴前御林裾」とある。同一地名の記された国分寺瓦もあり、県史跡である「赤沼国分寺瓦窯跡」（稲村坦元他「埼玉県比企郡今宿瓦窯址」『日本考古学年報』3 誠文堂新光社 1955）と同一窯跡か不明である。赤沼国分寺瓦窯跡から山下守昭氏によって、緑山遺跡と同技法、類似胎土の平瓦が採集されており、同窯の操業開始が国分寺創建時以前に遡るうる可能性 がある。
- (9) 高橋一夫他『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編纂室 1982 で単弁15葉と報告されたが、訂正するとともに時期も創建瓦でなく、後に述べるようにやや新しいと考えられる。
- (10) 註(4)の図14
- (11) 山下守昭氏より資料の提供を受けた。
- (12) 石田茂作「飛鳥・白鳳の寺院」『飛鳥時代寺院址の研究』P103 第一書店 1936
- (13) 高橋一夫「埼玉県古代廃寺跡発掘の現状」『歴史手帖』10巻10号 名著出版 1982
- (14) 多宇邦雄「下総竜角寺について」『古代探叢』P484 早稲田大学出版部 1980
- (15) 大江正行「金井廃寺の意義」『金井廃寺跡』吾妻町教育委員会 1979

- (16) 林 博通他『榎木原遺跡発掘調査報告書』図版69 滋賀県教育委員会 1975
- (17) 註(9)の第47図
- (18) 今井 宏他『児沢・立野・大塚原』埼玉県遺跡発掘調査報告書第28集 埼玉県教育委員会 1980
- (19) 坂野和信「北武蔵における古代瓦の変遷」P169 註(9)に同じ。また国分寺創建以降、8世紀後半代に置く見解もあるが、単弁系の発達した武蔵国において、しかも国分寺に単弁が採用されてからのちに複弁は出現しなかったと考えたい。
- (20) 高橋一彦「岡部町岡より出土する布目瓦」『いぶき』8・9合併号 県立本庄高等学校考古部 1975
- (21) 有吉重蔵「東京都古代廃寺跡発掘の現状」註(3)に同じ
- (22) 宝相華文軒丸瓦に「珂」の銘書きがある(大川 清『武蔵国分寺古瓦埴文字考』小宮山書店 1958)。宇野信四郎氏によれば、那珂郡銘の瓦は、泉井・赤沼・末野から(宇野信四郎「武蔵国分寺の文字瓦一窯跡出土例を中心として」『日本歴史考古学論叢』第2 雄山閣 1968)。大川氏によれば東金子・大丸・本部からも発見されている。しかし多くは刻印で、銘書きは泉井から発見されており、「珂」の軒丸瓦も武蔵北部でつくられたと考えられる。
- (23) 金井塚良一「北武蔵の古墳群と渡来氏族吉士氏の動向」『武蔵考古学資料図鑑』校倉書房 1976
- (24) 原島礼二「関東地方と帰化人」『台地研究』No.19 台地研究会 1971
- (25) 岸 俊男「日本における『戸』の源流」『日本歴史』197 1954
- (26) 県史編集室編『神奈川県史』資料編20 1979
- (27) 朴 容煥、泊 勝美訳「百済瓦当の体系的分類—軒丸瓦を中心として—」『百済文化と飛鳥文化』吉川弘文館 1978
- (28) 勝呂(スグロ)は渡来氏族の姓「村主(スグリ)」の転化だといわれ、坂戸市内に他に2ヶ所の勝呂があることは、渡来系氏族との関連を考えるに1つの材料となろう。
- (29) 野部徳秋他『田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川』埼玉県発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会 1974
- (30) 註(22)の両文献の他、坂詰秀一「武蔵・谷津池窯跡」『台地研究』15 台地研究会 1964、同「武蔵国分寺瓦窯跡の性格」『考古学ノート』1971
- (31) 註(22)に同じ。このような動きは宝亀2(771)年、東海道に転属した背景にもうかがえる。
- (32) 註(3)のP190